

# 海馬・迷路・記憶

岡市広成

近年、私の研究の中で最もよく使用している言葉を並べてみたものである。迷路と記憶については多くの方にあるイメージをもたらずと考えられるが、海馬については海馬の馬がなぜ心理学の研究者の用語の中に登場するのか不思議に思われるであろう。

ギリシャ神話の中でゼウスの兄弟神ポセイドンは海の神様として知られる有力な神である。彼は泉の支配者であり、大地の神であるとともに、この世に馬を創り出した馬の神でもある。頭髪は蛇、その眼を見れば相手を右に化すと恐れられたメデュウサ・ゴルゴンとの間に有翼の天馬ペガソースをはじめ多くの馬をつくったと言われて

いる。海馬『ヒポカンパス』はその兄弟であり、馬の胴を有し、魚の尾をしており海上を自由に駆けめぐることができた。三叉の戟を持つ父ポセイドンを載せ、荒波をけたてて進むのが海馬である。私達は現在、不格好な小さな魚(体長七センチ位)、龍の落し子に海馬の姿を認めることができ。昔から頭の内部を調べる勇氣を持った人々は、ぐるぐると巻きこんだ特徴のある形を脳の中に見つけ、それを海馬と名づけた。十六世紀、アラランチウスはヴェニスで出版した書物の中で脳の『海馬』を紹介している。

ほぼ球状の脳の表面をおおっているのは

大脳皮質である。それは系統発生的に古い順に旧皮質、古皮質そして新皮質と分類することができる。海馬は古皮質に属し、新皮質の内側にある。人間では新皮質の発達がいちじるしいため、海馬は脳の側頭部の内側に押しこめられている。

脳の機能についての科学的な研究がすすめられるようになるには、特定の脳部位の損傷と機能障害との関係が明らかにされだす十九世紀を待たねばならない。脳と記憶との関係については、一八八七年パリの神経病理学・精神医学会議でロシアの医師コルサコフが報告した慢性アルコール中毒に伴う記憶障害が人々の注目を集めた。この症状はコルサコフ症状と名づけられ、海馬と関係を持つ乳頭体に生じた損傷が関係すると見られていた。

それから七五年後、モントリオールの神経学研究所で心理学者のミルナーは、海馬を中心とした側頭葉の内側部を切除した一人の患者(H・M)を二十五年にわたり観察し、海馬が記憶に重要な役割をはたしていることを明らかにした。ひどいてんかん発作に悩まされていたH・Mは二十七歳の

時に脳外科医スコービルによって大脳半球の側頭葉内部の病巣を破壊する手術をうけた。手術後、H・Mの知能や情緒には何の変化もなかった。しかし、手術を境として、それ以後の経験を記憶することができなくなるほどい記憶の障害を示した。例えば、彼をかわいがつてくれた叔父の死を初めて病院で聞かされた時、大変歎き悲しんだ。その数日後、あの叔父はどうしているかとたずね、再びその死を告げられ、最初の時と同じように歎き悲しんだのである。

万事がこの調子であったが、不思議なことに手術以前に経験した事、特に幼ない頃の思い出などはあざやかに思い出すことが出来た。彼の母も彼の記憶が正しいことを認めたのである。

また、手術後の事柄であつてもほんの短い間だけ覚えておけばよいような事柄、例えば電話をかけるまで電話番号を覚えておくというような短期の記憶は失われていなかった。さらに、どのようにしてそれを行つたかという手段についても、長期にわたつて記憶されていた。心理学で知覚と運動の両機能の働きを検査する問題に鏡映描写

がある。これは、鏡に映つた星形の細い通路を鉛筆でたどる作業である。この作業では、誰でも最初は大変困難を感じるが、やがて上手にたどれるようになる。H・Mも訓練の結果上手にでき、三日目には最初からうまくたどることができた。しかし三日目に、このような問題を以前にやったことがあるかと尋ねられると、そんな経験はないと答えるのであつた。

H・Mをはじめ脳損傷患者の観察研究に刺激され、海馬と記憶についての実験的研究がすすめられるようになった。研究には、脳の損傷や電氣的な刺激あるいは脳の電氣的な活動を記録するというような手法を用いるので、人間を対象としては選べない。そのため、ネズミ、ネコ、ウサギ、サルなどおなじみの実験動物を対象として実験を行う。

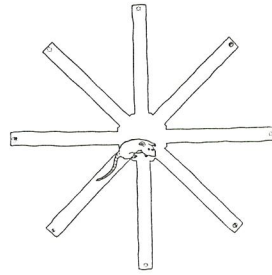
ところで、動物にあることを学習させ、記憶を調べる実験に用いられる課題に迷路の学習がある。迷路は人間にとつても昔から大変なじみの深いものである。これもギリシャ神話の有名な物語である。クレタ島に怪物ミノタウロスの住む地下の宮殿ラヴ

イリントスがあつた。この宮殿に一度入ると二度とは出てこれないと言われていた。この怪物を退治したアテーナイの英雄テーセウスといえども糸まきの糸の助けを借りなければ出てこれなかつた。ラヴィリントスと言えば迷路の代名詞のようにいわれ、複雑で解決の糸口の見つからない事件はこれを迷宮入りと呼ぶのである。

ラヴィリントスの迷路の有様はわかつていないが、心理学でよく知られているのにハンプトン宮殿タイプの迷路がある。イギリスの庭園の樹木は、時に幾何学的な姿に刈りこまれている。ハンプトン宮殿の広い庭は人の背だけを越える生垣作りに仕立て上げられ、複雑に入り組んだ通路を形作り、一度庭園に入ると出るのが困難であつた。

このように複雑な通路の組合せを持つ迷路を実験室に組み立て、ネズミによる学習と記憶の実験に用いる。実験室の迷路は大別すると、通路の両側を壁で囲った廊下式のもの、通路が高い台の上に載つた高架式のものがある。前者でのテストはいかにもドブネズミが溝の中を通りぬけていく様

子を思わせ、後者ではハタネズミが畑の中  
で餌を求めて走りまわる姿を思い浮ばせ  
る。



放射状迷路の図

最近、海馬と記憶についての実験で数ある迷路の中でも高架式の放射状迷路がよく用いられる。ジョンズ・ホプキンス大学のオールトンは、図のような迷路の八本の通路の先端の窪に小さな餌を置き、空腹のネズミを中央においてネズミが餌を食べてまわる行動を観察した。彼によると、ネズミは少し訓練をするだけで、上手に餌を食べる餌を食べた通路に二度入ることなく、八回の選択で八本の通路を訪ねることができるのである。その際、ネズミは次々と隣合った通路を選ぶのではなく、ゆきあたりばっ

たりに八本を選んでいくということである。

この実験で、ネズミはすくなくともふたつのことを記憶しておかねばならない。第一は、八本の通路のそれぞれが実験室の空間の諸刺激に対してどの位置を占めるかということ、第二は、今までにどの通路で餌を食べたかという記憶で、八本の通路をすっかり選び終わるまで必要なものである。前者を空間記憶といい、後者を作業記憶と名づけている。

オールトンは海馬を損傷したネズミで実験をくり返したのち、海馬は作業記憶と関係すると述べている。すなわち、海馬を損傷されたネズミは、すでに餌を食べてしまった通路を忘れてしまい、再び同じ通路に入ってしまうのである。オールトンは、海馬の機能を説明するのに空間記憶と作業記憶という二つの概念を提唱したことに意義がある。しかし、彼の実験ではこの概念がうまく区別されていない。

そこで筆者はすこし手順を変え、空間記憶と作業記憶の手続きをはっきり区別する

ことにした。それは、八本の通路のうちいつも決まった場所にある四本の通路にのみ餌を置くことであつた。ネズミは先の実験よりもっとはつきりと、どの四本の通路に餌があり、どれにはないかを記憶せねばならない。もちろん餌のある通路については、どの通路をすでに訪ねたかも記憶しておかなければならない。普通のネズミは上手に問題を解決した。しかし、海馬を損傷したネズミでは、作業記憶の障害よりもむしろどの通路に餌があるかの記憶、つまり空間記憶に障害が生じたのである。調べようとする問題にあわせて実験の条件を整えることによって、海馬損傷の効果がよりはつきりとしてきたと考えられる。

いづれにしても、ネズミの実験で示した結果は先に示したH・Mの結果と必ずしも一致しているわけではない。このような違いが生じる原因は、ネズミとヒトとの差によるのであろうか。あるいは、調べるべき課題が適切でないためであらうか。いつの日にか海馬と記憶との関係を明らかにしたいものである。

(文学文学部教授)

# 米と十字架

坂本武人

例えば、駅弁を買い、やおら箱を開け食べようとすると、まず、蓋の裏にくっついた五、六粒のご飯から食べ始めるのは、昭和ヒトケタ生まれ<sup>①</sup>という説がある。

たしかに、昭和五年生まれの私をはじめ、昭和ヒトケタ生まれの者たちは、その育ち盛り、食べ盛りの真最中に、あの愚かな戦争に巻き込まれ、米の飯どころか雑炊さえ腹一杯食べることができなかった経験を有している。それだけに、いまなお、米に対する特別な思いを持ち続けているのである。

余談になるが、戦後、いかに米が一般庶民に縁遠いものであったかを数字をあげて

示してみよう。現在、生活費の調査として

は世界的評価を得ている総務庁(総理府)統計局の「家計調査報告」は、昭和二十一年七月、「消費者価格調査」として始められているが、この最初の月、すなわち昭和二十一年七月二十九日から八月二十五日までの東京における米の購入量をみると、一世帯当たり平均三・七二kg(うち配給〇・七五七kg、闇二・九六五kg)となっている。この時の平均世帯人員は四・五四人であったから一人一日当りは二九gにすぎず、配給米だけに限ると実に一人一日当り六gという量であった。それゆえ、山口判事のよ

うに闇米を買わない遵法生活を貫けば飢え

死する他はなかったのである。

ところで、日本人の米に対する特別な感情は、単に、このような飢えをじかに体験してきた昭和ヒトケタ生まれに限らないという数字がある。すなわち、私の研究室(同志社女子大学家政学部家庭経済学研究室)において昨春秋、京都に住む一六〇〇人の消費者(主婦)を対象としたアンケート調査の結果は、老いも若きも大多数のものが弁当箱の蓋についたご飯から食べ始めるであろうと思わせるデータを示している。

具体的には、「あなたは、食事のとき家族がご飯を残した場合、もつたいないと思いますか」との質問に対し、「もつたいない」と思い、一粒残らず食べるようにすめる」というものが有効回答者一二二八人中八六〇人(七〇・七%)もあったのである。そして、これを年齢階層別にみると、最も多かったのが二十歳代の八八・九%であり、逆に最も少なかったのは、全員、昭和ヒトケタ生まれということになる五十歳代前半の六四・七%である。

このように、ご飯を残すのはもつたいないことであり、一粒残さず食べる、あるいは



は家族に食べさせるという比率が高く出たのは、この調査が、史上まれにみる高視聴率をあげた『だいこんめし』『おしん』のテレビドラマの放映中であつたことも幾分影響しているであろう。しかし、このようなことを考慮に入れても、家族にご飯は一粒残さず食べさせるとするものが七割を越えていることは、米がいかに私たち日本人の生活に深く根差しているか、そして、また、米の飯と食生活は切り離すことのできないものと意識しているかがわかる。

米の飯だけではなく、米作りについても特別な意識をもっていた。すなわち先の私の研究室の調査において、「あなたは世界的な食糧危機などに備え、日本では割高でも米作りを続けるべきだと思いますか」との問いに対し、「思う、そしてできるだけ米を中心とした食生活を心がける」というものが全体の三分の二に当る六六・七%を占めていた。

もちろん、古くから豊葦原瑞穂の国といわれてきた日本であるから、何よりも最優先に米を作り続けなくてはならないとか、昔から米を主食としてきた日本人だから米

を食べ続けるべきだという固定的な考えに囚われることはない。

しかし、伝統的な米作り、あるいは米の飯を大切にしなければならぬ、あるいは大切にしたいという心が、このように多くの日本人の心に宿っているという現実は見逃すべきではないであろう。

経済の高度成長とともに発展してきた日本人の生活は、たしかに豊かになり便利になつている。しかし、この豊かさ、便利さの本質をたずねてみると、「依存効果」とか「デモンストレーション効果」と呼ばれる要因、すなわち、宣伝や広告にひきずられたり、流行に影響され、知人、友人に触発されて購入するものが、その殆んどといえる。それゆえ、これは、あたかも、天に向かつて築き上げる「バベルの塔」のように、これで良しとするところのないものであり、得られた豊かさ、便利さと同時に、もっと豊かに、もっと便利にといい不足感、不満感も常について廻る。

かくて、いま、人びとの生き方に二つの大きな流れが発生している。一つは、先のことはどうでもよい。今日一日の豊かさ、

便利さに身を委ねようとする生き方であり、その心を瞬時でも奪ってくれるものを手当り次第に購入する浪費的な生活である。そして、この極端な場合の行き着く先は、いまはやりの「サラ金地獄」である。

いま一つの生き方は、作られた変化を無為なものとして意識し、外のものではなく自らの内に積み重ねてきた情報、知識をよりどころとして着実にその生活の向上を図ろうとするものである。米作りや米を「特別」なものとし伝統に根ざしながらも、そこから新しい生活様式を生み出そうとする意識はこの範疇に入るものである。

石油に頼つて発展してきた世界の経済が行きつまりをきたしている現在、浪費による生活の発展、拡大は行きつまっている。そして新たな向上は、消費者の中に蓄積されている優れた経験的知識、情報を主体的に活かすことにあるという気運が生まれつつある。

創立二百年に向かって大いなる前進の期待されている同志社も、外からの誘因にもとづく表面的な変化や発展ではなく、いま一度、原点に還り、創立以来の優れた伝統

の中に存在する、真の意味での向上、発展の可能性を探ることが必要といえる。

同志社教育の原点とは、創立者新島襄先生が『同志社設立の始末』に「吾人は敢て科学文学の知識を学習せしむるに止まらず、之れを学習せしむるに加へて、更に是等の知識を運用するの品行と精神とを養成せんことを希望するなり、而して斯くの如き品行と精神とを養成するに決して区々たる理論、区々たる検査法の能く為す所に非ず、実に活ける力ある基督教主義に非ざれば、能はざるを信す」と誌されているように、イエス・キリストの十字架に象徴される神の愛の溢れる教育を根幹に据えるところにある。

日本人が、その生活の中心に米を置く以上、同志社の教育の中心には神の人類に対する愛のシンボルとしての十字架が置かれるべきである。

キリスト教主義が、同志社に学ぶものの血となり肉となつて、その人間性の形成に多大の影響を与え続けてきたことを実証する数字がある。すなわち、昭和五十四年六月、同志社女子大学家政学部が、同女子大

およびその前身としての女子専門学校の家政関係学科の卒業生を対象に行ったアンケート調査の結果である。これによると、昭和三十年までの卒業生の五人に一人（一九・八％）は、入学の動機として「キリスト教主義学校」であることをあげ、入学後は毎日行われる「学内礼拝」に八割近く（七八・六％）が「ほとんど毎回」出席し、卒業後、「同志社で学んでよかったと思う」として「キリスト教の考えが身につけて良かった」をあげるものが半数近くの四八・六％を占めていた。

その後、大学の大衆化、グレジャー化などといわれる現象の中で学生の意識も大きく変わった。そして、昭和四十年以降の卒業生は、キリスト教を求めて入学したものは十人に一人（一〇・四％）、殆んど毎日、礼拝に出たもの二十人に一人（四・七％）に激減している。しかし、それでも、「キリスト教の考えが身につけて良かった」とするものは四人に一人強の二六・八％もある。

何千、何万と数限りなく生産され、供給される財、サービスの中でも、長い歴史を

通して日本人の生活を支えてきた米だけは特に大切なものと意識し、他を排除するのではなくそれを中心に据えながら、新たな生活の向上を図ろうとする叡智が、いま、私たち日本人の中に生まれつつある。

同志社にあつても、十字架上のイエスを仰ぎつつ、その背後に溢るる神の豊かな愛に思いをいたす教育が根幹に置かれ、それを中心に、あらゆる学問、あらゆる研究が自由のびのびと続けられる新たな在り方が、いま真剣に求められる気風も再生しつつある。この気風に応える体制を整えることがいま同志社における最重要課題といえよう。

（女子大学教授）

# 日記にみる新島襄

——『新島襄全集』第五巻を編集して——

## 河野仁昭

新島襄が日記をしたためた簿冊は、その形体と記述内容から、次の三種に分けられる。

ひとつは旅行に携えて行ったもので、タテ10cm・ヨコ16cmほどの小型の和綴の簿冊であり、いま一つはタテ23cm・ヨコ16cmくらいの和綴の簿冊で、これには校務に関することが日録ふうに記されている。「同志社記事」や「募金日誌」などがそれである。そしてもう一つは洋製本の大型の手帖で、これには海外旅行中の日記や見聞が英文で記載されている。彼はそれらを意図的に使いわけていたとみられるのである。

全集第五巻に収録したのは、主として旅

行に携帯して行った七冊の日記と、脱国した年の「航海日記」、和紙に書いてのちにコピーで綴じた「函館紀行」の類のもので、巻末に詩歌を収めた。

これらの日記は、新島が筆まめな人であったことをうかがわせるし、彼の足跡と、訪問地の状況や景観、出席した集会、会った人物、読んだ書物などもほぼたどれるような記述内容になっている。新島を知るうえで不可欠の文献であるこというまでもない。

紙幅の関係もあって、ここですべての日記を概観するわけにはいかないので、特に印象ぶかかった明治二十一年の記事を紹介しようと思う。「出遊記」と「漫遊記」（いずれも新島が記した表題）がその該当簿冊で、彼はときどき同じ年月の記事を、精粗の別はあるが重複して別々の簿冊に書くことがある。その理由は判然としないケースが多い。

明治二十一年は、新島にとってかつてない繁忙と心労がかさなった年であった。一月から四月上旬まで、大阪や神戸に向くことはあったが、彼はほとんど京都にいた。その間のことは主として「同志社大

学記事」（全集第一巻）に記されているが、募金運動を展開するに当たって、彼は先ず地元の京都を固めようとしたのである。四月十二日には知恩院に六百余名の参集をえて大集会を開催しているから、その準備に奔走したといつてよい。集会を成功裡に終えると、彼は待ちかねていたように、四月十六日「京都ヲ発シ、同日正午〔神戸港で〕相模丸ニ乗込マ」（「出遊記」）東上した。もちろん募金運動のためである。募金のアピール「同志社大学設立の旨意」が『国民之友』や数種の新聞で発表されたのは、その年の秋十一月である。

この年は、前年来の一致・組合両教会の合併問題について結論を出さねばならぬ年でもあった。組合教会は十一月二十三日から二十八日にわたる大阪教会での臨時総会で、新島のつよい不賛成の意向もあって翌二十二年五月まで結論保留を決定した(『同志社談叢』第四号「組合教会臨時總會記事」参照)のであったが、この問題に関する新島の手紙やおびただしい意見草稿(全集第二巻)をみれば、いかに彼の苦慮が深いものであったかが察せられるのだ。彼はほとんど孤立無援の反対運動を続けたのであった。

この二十一年はまた、同志社の組織を再編成し、体制固めをおこなった年でもあった。在学生数は十九年に男子二五二名、女子八十三名であったのに対して、二十一年には男子六七四名、女子一七三名に急増している。

二月に小崎弘道、宮川経輝、湯浅治郎、大沢善助の四名を社員に加入せしめる旨、新島は府庁へ届け出た。それまでは新島、山本覚馬、松山高吉、中村栄助、伊勢時雄の五名であった。

六月には諸学校の組織を改めて、同志社学院に統括した。徳富猪一郎に起草を依頼していた「同志社通則」を制定・公布したのも、この年の九月である。

以上のほか、関東、東北、信越地方の伝道の問題が、新島の心を領していた。

こうした状況の渦中であって、彼の健康状態はどうであったのか。前年夏には二カ月ばかり、涼しい札幌に赴いて静養しなればならなかったのである。

二月初ろ、金森通倫をともなうて募金運動のために渡米しようと企てた新島は、病体のゆえに同志社病院長のJ・C・ペリーに制されたといわれる。四月に上京して以来、森有礼文部大臣から紹介をうけた医科大学のベルツや、橋本陸軍軍医その他の医師に、募金運動の間隙をぬってしばしば診察と投薬を受けているから、健康状態はよくなかったのである。事実、四月二十二日には井上馨邸での小集会中に脳貧血で倒れ、五月二十一日には鎌倉方面へ赴いた旅先で「呼吸甚悪シクシテ眠成ラズ」(「出遊記」と記し、五月二十四日から六月十一日まで、富田鉄之助夫妻に案じられて鎌倉

の海浜院へ入院している。六月七日に八重が入院先へ来ていることから際して、病状がよくなっていたとは思われない。

だが、新島は、「昨日は金森より来書有之、米国より五万弗文ケ寄付スベキコト申來、而して小生等之米国行ハ先ツ差止参候。但シ此差止之事ハ、小生等慎而其命を奉ズルヤ否未タ相分不申候間」(徳富猪一郎宛、明治・21・5・25)と書いているから、日本での募金状況如何では渡米する意思を捨てていなかったとみてよい。

八重と共に東京へ帰り、六月二十九日に幾度目かの診察をベルツに受けた新島は、「回復ハ期スベカラズ」(「漫遊記」以下同)と告げられている。胃もよくなかった。そして七月二日にはベルツと合診してくれたこともある難波医師から、新島の容体について八重は絶望的ともいえる診断結果を告げられるのだ。その夜の日記に、新島に次のように書いている。

「八重、医師難波一氏ヲ訪ヒ、予ノ病情ヲ聞ケリ。

氏曰ク、予ノ心臓病ハ全治ヲ期スベカラズ、又心臓中ノ薄皮ノ如キモノ血中ニ混



ジ、脳中ニ上昇セバ直ニ卒中ノ如キ病症ヲ  
来シ、落命スルニ至ル場合モアルベケレ  
バ、予ノ身内ノモノハ予メ之ヲ承知スベキ  
キ旨ト、亦他（ノ）速死ノ倒証ヲ挙ゲテ談  
サレタリ。八重ノ愁歎一片ナラズ、大ニ予  
ノ心ヲ痛メシメタリ。

予ハ元来全治ノ望ナキハ已ニ知り、又イ  
ツデモ天父ノ招ニ応ジ、天堂ニ進ムベキ覺  
悟ハナシタレバ、別ニ耳新シキ語ニアラ  
ズ、又別ニ驚キモセザレドモ、後ニノコス  
ベキ老母ト愛姉ノ事ヲ思出シ、時々涙ニ袖  
ヲ湿スニ至レリ。」

読み返すたびに胸を衝かれるおもいがす  
る記述である。これに続いて彼は脱国以後  
の出来事を手短かに回顧したあと、遺言も暇  
乞いもできぬままいつ此の世を去らねばな  
らぬかもしれないことを思い、「感涙転枕ヲ  
湿スニ至ルモ知ラザリキ」と書いて筆をお  
いている。彼は恩顧を受けた人々に謝辞と  
別れのことばも告げずには、世を去りたく  
なかつたのである。

その日と、以後二、三日にわたって、彼  
はJ・D・デイヴィスその他に、死別の思  
いをこめた手紙を書いている。うち一通は

A・ハーディー夫人あてであつた。

「かすかに回復しつつありますが、再び健  
康になることはもうあるまいと信じていま  
す。医師によると私の心臓は肥大してお  
り、元の大きさに戻る見込みはなく、私の  
肉体の生命にはいつ終わりがくるかもわか  
らぬということです」と彼は告げて、別れ  
のことばと謝辞をのべたあと、「私は京都  
の学校をキリスト教主義の大学にしたいと  
いう悲願を抱いています。このために東京  
に來たのです。このために病氣になり、卒  
倒しました。このために今なお東京にとど  
まっています。（中略）残念ながらこれか  
らは奥様にあまりお手紙を差し上げられな  
くなると思います。たとい私がこの世を去  
ることになりましたも、あまり悲しまない  
で下さい。（中略）私はまだ生きる望みを  
もっています。がしかし、この世を去る準  
備もできています」（北垣宗治教授訳）と  
書き送っているのだ。

さすがにこの年の夏は、医師のすすめで  
七月二十七日から九月十四日まで伊香保温  
泉で静養し、十月二十五日に京都に帰って  
から一カ月余は自宅で執務して、十二月十

二日から翌二十二年三月末まで神戸の諏訪  
山に借家を借りて病養生を送っている。

だが、病養生にも訪問客はあいつぎ、そ  
の応待と、寄付依頼や伝道のための手紙を  
書きつづけ、教会合併問題で悩んでいる。

健康回復の望みを、新島はほとんど持っ  
ていなかったらう。そのせいだけではある  
まいが、彼の最晩年の一年余は、死に向か  
って挑むような働きぶりであつた。彼の死  
とともに募金運動も終焉したことを思え  
ば、彼がほとんど唯一人、牽引車となり、  
前衛をつとめた運動であつた。

彼の日記は、明治二十三年一月十五日の  
次の記述で終わっている。

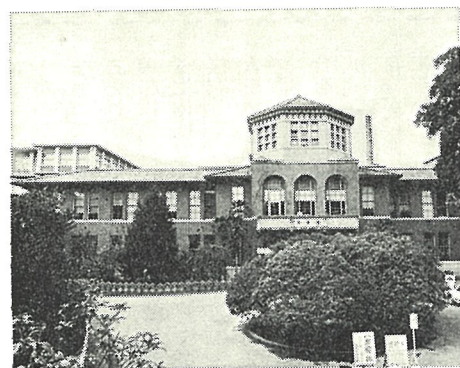
「長野地方ニ新ニ伝道ニ着手センガ爲ニ、  
上毛ノ兄弟不破、杉田、杉山之三氏ハ十三  
日ヨリ出張セリ。此ヨリ信州伝道ノ端緒ヲ  
開クベシ、愉快々々。」（漫遊記事）

翌十六日から腹痛が治まらなくなり、二  
十一日より病状が急変した。そしてついに  
彼は一月二十三日に地上の生命を終えた。  
死因は「急性腹膜炎」（「死亡證」であつ  
た。

（社史資料室長）

# 同志社栄光館の「格好」<sup>「プロポーション」</sup>について

前 久 夫



同志社栄光館は、そのユニークな八角の時計塔（現在時計はない）をもつことで、女子部構内のシンボルともなっている。東西に正しく一列に並ぶ一東から静和館・栄光館・シエームス館と、女子部の主建築の中央に位置し、大講堂を備えていることから判るように、文字どおり中心的建物である。この一連の建築計画は、同志社の女子教育に、その生涯を捧げたミス・デントン（Mary Florence Denton 1857～1947）の長年の理想であった。そしてこれを実現させたのが、京都帝国大学教授であった武田五一博士（一八七二～一九三八）である。

この建物の創建事情や規模などについて

は、拙稿を参照いただきたい。ここでは武田五一の語る、いわゆる「造形言語（言語や文字に對し造形活動によって作られる記号。ここでは栄光館の建物に表われた、武田のデザイン理念）」に耳を傾けてみることにしよう。

武田五一には、「建築物の格好に就いて」と題する初期の論文がある。一般の眼には触れ難いものなので、少し詳しく述べておくと、これはもともと建築学会で行った講演（研究発表）<sup>③</sup>が、のちに同学会の会誌「建築雜誌」<sup>④</sup>に掲載されたものであり、さらに彼の没後に編まれた論文集にも収録されている。

ここで彼は建築物のプロポーションつまり格好について論じているのである。建築を美的対象として論ずることは、今日の建築界はもとより、学会においても、むしろプリンシプルな課題と考えられている。しかし当時（明治三十三年）としては、意表をつくようなものであったといわれる。

ここでいう「格好」というのは、彼の言に従うと「割合」つまり「Proportion」のことである。そして「割合の美、プロポーションの美と云ふことはドウ云ふことであるかと云ふ」<sup>⑤</sup>（原文ママ、以下同じ）ことを、「帰納法、

Induction の方法で研究した結果を」述べているのである。先ず順序として西洋の建築学者たちの、それぞれの説を紹介し、「善い建築と称せられ得るものは、大低次の幾何学的割合を有するものである。」と結論づけている。その割合というのは、こうである。「第

一は正方形の割合即ち正方形を基とするもの、第二は、等辺三角形の一边と其高さの比即ち等辺三角形を基とするもの、其次は、四十五度の直角三角形の一边とその割合、即ち本邦にて裏目と称する割合を本とするもの、それから其次は、相隣れる二辺の比例が黄金載（黄金比）をなして居る長方形を基とするもの」さらにこれらの形式を「色々にごっちゃに集め」たものとする。そしてこれらを、つぎのような数値で表わしている。

正方形二辺の比

1:1

等辺三角形一边及高さの比

$1:\sqrt{3} \dots\dots 1:1.732$

裏目の比

$1:\sqrt{2} \dots\dots 1:1.414$

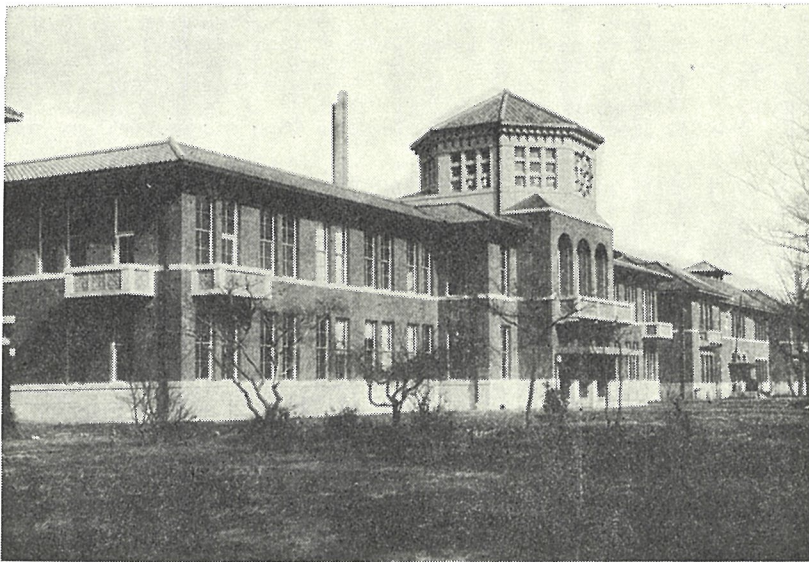
黄金載の比

1:1.618

ところで、このように西洋の学説を研究し紹介するだけに留まるならば、例えそれが明治の開化期であったとはいえ、瞠目するには

当らないであらう。進んで彼は、これを日本建築に応用し、「此理窟が成立つか成立たないかと云ふこと」を試みているのである。

対象として楼門をとり挙げ（建築史家伊東忠太の助言に依り）、鎌倉時代から江戸時代にわたる、三間一戸の遺構十二例と五間一戸のもの四例を「勘定」している。その結果「互々の間の数の関係が、最も幾何学的の關係を持つて居る」とを立証し、一方「日本の建築の格好の取り方は、細部で発達して居て全部（全体の意味か）で発達していない。それ故に其の割り方は、細部を前にして段々全部を造って行くのですから、ドウも細い部分は宜い形が出来るが全体の格好は若し木割に依ってやって行



榮光館（創建当時）



けば、多分は失敗に帰する。」と、わが国の木割法（伝統的な日本建築において、各部の比例と大きさを決定するシステムまたは原理。「規矩」ともいう。）を批判している。

ところで武田は、その恵まれたデザイン能力を駆使して、生涯に実に一五〇件にのぼる作品をのこしている。そこには当然のこととして、この若き日の研究から得た確信が、いわば造形言語として語られているに違いない。

ところが管見では、以来彼の手記はもろろん言葉としても遺されていない。そこで最近調査する機会に恵まれた、——彼の生涯からいえば晩年の作品に属する、この栄光館について、その「嗜好」論を実証してみようと試みたのである。

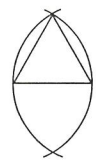
さきにも触れたように武田と同志社との関係は、主として女子部においてであった。静和館（大正元年竣工）、ゼームス館（大正三年竣工）そして栄光館（昭和七年竣工）などの設計監理を行う一方で、専門学部で「建築学」を講じている。彼の手記によると、「ミンス・デントンとの特殊な関係から依頼されたもので、又日本に対するデントン女史の熱意にうごかされて引き受けたもの」であった。

ここで前二者の建築について触れている余裕はないが、建物相互のかもしれない景観というもの、つまりここでは同志社女子部キャンパスの景観というものに、いかに建築家としての意を用いていたかは、そのマスター・プランを見れば一目瞭然である。戦後わが国の建築界においても、都市景観や歴史的景観保存などの研究や実践が、大きな課題として浮び上ってきている。武田は、まさにその先達であったといえよう。彼は本部つまり共学のある構内の建築には携わった形跡はない。それだけに、彰栄館・礼拝堂・有終館などの一連の明治建築が建てられたあと、新しく建てられていく建物を前に、つぎのように嘆いている。

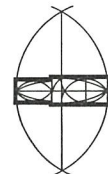
「以上の三つの建物と全全調和を欠き、各々出鱈目に建てられたことは、同志社コンパウンドの上からも悲しむべき現実と云はなければなりません。もし以上の建築を模範とし且つその意匠を尊重して行ったならば、さぞ面白い学校建築の一群が出来たであろうし、恐らくは日本でも有数な学校建築のコンパウンドとなつたであらうと思はれます。最初の建築者の考へは勿論そうした処に、あったのに違ひないのですが、その後それを継ぐ人のな

かったことは、かへすがへすも遺憾のきわみと云ふべきです。」この建築家としての良心が、女子部コンパウンドに情熱をかけることになったのであろうか。

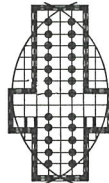
ここで再び武田の論文にもどるが、ゴシック建築を研究したA. Durerus（十六世紀のひと）のVesica Piscis（魚の浮袋の意形）を紹介して、「善いものは、大低此形で囲むことが出来るか、或は此形を基とすることが分つた」といつている。その形というのは、「一つの直線を拵へて、其直線の長さを半径として、其線の両端から円を画く」のである。（図I）そして栄光館の建築に適用したのがAからHまでの形である。つぎにCesurianoという人の、TirgonoとParquadratoとごう二つの方法である。（図II・III）前者はさきさきのベシカピシスと同じ方法であり、後者は「第一



図I Vesica Piscis



図II Tirgono

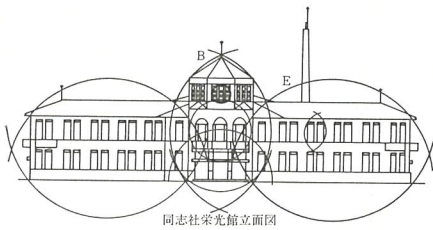


図III Parquadrato

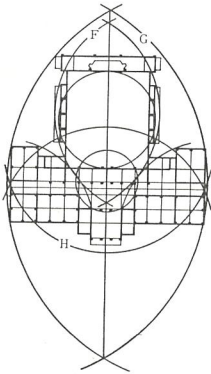


の法にて定めたるプランを或数の正方形に分割して、其分割点の会点に、或る建物の柱及バットレス等を当て嵌める法である。これを同じく栄光館に適用してみたのが、一階平面図におけるそれである。

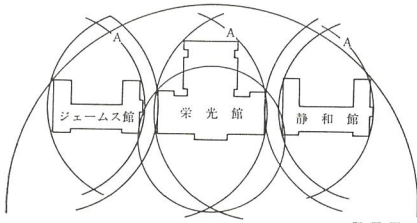
このようにみてくると、この建物が彼のいう「善い形」になっていることは、決して偶然ではないように思われる。また三館を一つのコンパウンドとして計画していたことは、それぞれ建築年代を異にしたがらも、配置図



同志社栄光館立立面図



桁行51.00メートル  
梁間47.25メートル  
1階平面図



配置図

に見られるように、寸分の移動も許さぬ、度々なまでのプランに表われている。また左右対称の端正なエレベーションも、さきのプロポーションに分析することができ、つまり「善い形」が応用されていることが判かる。またマスタープランに関しては彼の言を引くと、「形として、三館の中央主要なる建物として、栄光館が位置するために、其の中央主出入口の上に八角の塔を付けて以て、『セントラリゼーション』を試みたのであります。斯くなつて見ると暖房用の煙突が少々眼障りでありますが、之は必要上何とも致し方がな

いのは遺憾であります。」<sup>⑤</sup>この煙突の件については、よほど気になったとみえて図面の上で、再三にわたつて撤去と設置の推敲を繰り返している。三館の立面図を挙げる事が出来なかつたが、ほぼ同じ高さをもつ一連の建物は、配置図にみる平面と同様、シンプルにして、爽やかである。なおこれらの建築様式は、これも彼の言によるが「米国復興式」<sup>⑥</sup>である。

(注)

- ① 拙稿「同志社の近代建築(下)」(「同志社談叢」第4号 昭五九 参照)
- ② 拙稿 前掲書
- ③ 明治三十三年一月二十四日 第一六二号 明三三・六
- ④ 「武田五一博士論文集下 建築小論集」昭二一・一二
- ⑤ 前掲書 武田論文
- ⑥ 武田五一「同志社の建築について」『我等の同志社』昭一〇
- ⑦ 武田五一「栄光館の建築」(竣工式当日の式辞)
- ⑧ 栄光館新築工事設計図(同志社蔵)
- ⑨

(追記) 筆者としては、本文中「武田五一先生」と敬称すべきところであるが、略させていただいた。

(建築史家)

# ありがとう同志社

于 耀 明

## 一、同志社に来た喜び

私は同志社に来た。同志社の一員になった。日本の土地を踏んだとたん、いや上海空港をたったときに、もうこの喜びを感じた。到着したその晩は、これから同志社大学で勉強する期待と抱負とで夜が明けるまであれこれ嬉しく考えた。

思うに、私は初めて同志社を知ったのは一九七九年の夏頃だった。その時、私はまだ生まれ故郷の寧夏回族自治区農業研究所にいた。転勤するについて西安にいる妻と転勤口についていろいろ相談した結果、西安にある西北大学と決めた。主な理由は西

北大学が京都大学との学術交流協定が結ばれているからである。

京都にはどういふ大学があるか、日本語を専攻するまで私は知らなかった。これをきっかけとして、京都の大学を調べた。どの大学よりも同志社大学は印象深かった。というのは「同志」という言葉に不思議な魅力を感じたのだ。われわれの社会主義国には「同志」をよく使うのだが、資本主義国の日本にも使うのだろうか、まして「同志」をもって大学の名にすることは一層不思議でおもしろかった。

ところが思いもよらないことに、その翌年の五月に、西北大学学長の郭琦先生を始

めとする代表団が京都大学を訪問され、ついで同志社大学も訪問され、両大学の間に学術交流協定が結ばれた。それを聞いた時の私の喜びはいまだに静まらない。日本の私立大学―同志社、日本で初めてのキリスト教的良心に根ざした人間教育を基調とする大学―同志社、その名は強く私の心に刻まれたのだ。

日本へ行きたい、日本へ留学したい。これは私の希望であり、憧れでもある。一九八二年一月のある日、大学の方から、私を同志社大学へ留学させたいのだと言われた。しかし私はすぐに信じられなかった。冗談だと思った。でもこれは事実である。一瞬に喜びと途惑いが一度に心に起った。留学は私の宿願であるが、新島基金の留学生として、ふさわしいだろうか、かえって落ち着かなくなった。

いよいよ同志社へ行く日が近づいて来た。四月の六日、私は西北大学長の丸重起先生を始めとする視察団と一緒に同志社に来た。日本文化を育てた地―京都、そこにある同志社大学に来た。

## 二、良心ある丈夫に

同志社大学の正門に入ると、まず目についたのは「良心碑」である。「良心の全身に充滿したる丈夫の起り來らんことを」と新島先生の言葉が刻まれている。これは同志社全体の教育方針とも言う言葉である。一百有余年にわたって、同志社はこの方針をもって、幾十万人の良心ある丈夫を育てたのだろう。私は同志社に二年間いた。「良心碑」は毎日目にうつった。新島先生の言葉は毎日心にひびいた。「良心の全身に充滿したる丈夫」、私も良心のある丈夫になると、いつも心に誓って、自分を励ました。今も将来も良心のある丈夫になるべく努力する。

学問をするのは大事なことだ。ところが、いい社会をささえて、発展させるには頭の手だけでなく、心の力が必要である。現代の社会は、頭の手だけで済んだ社会は、頭の手だけで社会を維持している傾向が見えるのだ。幼稚園から大学まで受験競争が行われている話がよく耳にする。こういう環境のなかで、人間はい

つの間にか、心が歪んでしまう。頭の手でお金をもうける、お金の力で物事を運ぶのだ。現代人の信仰危機もこういうことから生まれたのだろう。こういったことは日本だけでなく、全世界の現象とも言えよう。

こういう時代的問題を解決するには、新島先生の「良心の全身に充滿したる丈夫」を養成する教育方針が必要であろう。同志社の教育方針は、同志社のものでなく、全日本、全世界の教育方針にもなるべきである。新島先生の精神は輝いた素晴らしいものだと思う。

「干君はめぐまれた人です」と留学生同志と日本人の友人から言われる。これは確かである。思えば、これはただの一言ではなく、いろんな事が含まれている。新島奨学金をもらっていること、新島旧邸の隣接した宿舎に住むこと、上野総長先生が身元保証人であること、本部庶務課の木村課長が面倒を見てくださること、国文の先生方が熱心に指導くださること、ほかに多くの先生方も友人がたも関心を寄せてくださることなどがその話の本意であると思う。

日本には「痒い所迄手が届く」というこ

とわざがある。この二年間私は正しくこういう待遇を受けたのである。

同志社のおかげで、皆様方のおかげで、私の二年間の留学生生活は幸福だった。

## 三、「漱石」と出会った

「干さんはなぜ漱石を研究するのですか。漱石のどこが好きなんですか」とよく日本人の友達から聞かれる。その度に私は言葉では表現出来なくなる。なぜ研究したのだろう。どこが好きだろう。一言ではどうも答えられない。普通の人は「好きだから読む、好きだから研究する」のだと思われる。ようだが本当はそうだろうか、一概には言えないと思う。退屈のぎに好きなことをするというのが普通の人の常だけれども、学問として研究するということは必ずしもそうとは言えない。研究者には自分の使命感があると思う。一旦自分の研究分野を決めたら、できるだけその分野における問題に対して力を尽して一つ一つ究明する。そこには好き嫌いはないと思う。

私は漱石と出会ったのは三年前で大連にある遼寧師範学院の日本語科で研修をした

時のことだった。中国で漱石の文学という  
と、まず知られているのは『吾が輩は猫で  
ある』とか、『坊っちゃん』などだ。俳諧  
的でおもしろさがある所がみんなに好まれ  
ている原因だろう。当時の私はただの漱石  
の愛読者であった。読解力が弱いため、読  
んでも読んでもちんぷんかんぷんで終わっ  
てしまうのだ。漱石を研究する意は毛頭な  
かった。ならば、どうして漱石を研究する  
のだろうか。率直に言えば、指導教授の玉  
井敬之先生が漱石研究の専門家であるから  
だ。玉井先生がいなければ、私はおそらく  
他の研究をしたと思う。ところで玉井先生  
のご熱心な指導のもとで、私の漱石理解も  
だんだん深くなり、漱石文学の本当のすこ  
さも分って来た。二年間で漱石研究の修士  
論文が書けたのは、半分は私の努力で、半  
分は玉井先生と国文の諸先生方のご指導の  
おかげである。

漱石文学研究を通して、明治文学のあり  
さまが分ってきたと同時に、明治社会の世  
相も分ってきた。論文を書くために、明治  
の歴史、江戸時代以後の日本の家族制度な  
どを研究したり、厚生館のお医者さんと渡

辺病院の院長先生を訪ねたりした。このた  
め、いろんな知識を身につけ、ともに学問  
を研究する方法をも身につけた。考えれば  
文学修士の学位をもらったよりも、こうい  
うものを身につけたことは重要だと思っ  
た。漱石研究をしてよかった。同志社に留学し  
てよかった。

#### 四、留学生の旅行

三月十三日、この日は私の忘れがたい一  
日でもっとも記念すべき一日だった。大学  
学事課主催の留学生旅行だった。

午前九時半頃、われわれ留学生たちは、  
大学教務部長の笹田先生を始めとする大学  
関係者に見送られて、観光バスに乗って、  
大学のキャンパスを出た。同行した方々に  
は、国文の広川教授、玉井教授（玉井先生の  
お宅は奈良で東大寺で待ち合わせをした）、  
向井教授、玉村教授等七人、社史資料室室  
長の河野先生、学事課の西原課長等三人、  
特別のゲストとして文化史学科の小川教授  
（奈良の名所を案内するため）、それに私と  
同じゼミの学友四人と韓国の二人の留学生  
のご家族などではば四十人だった。バスは

九条を出て、奈良へ向って走る。私はそこ  
の風景に見とれる。

ところで、急にバスの中に激しい拍手が  
起った。誰かがカラオケを歌うようだ。私  
は思わず首を長くして、前から後まで見  
た。女性の声だった。われわれの同胞黄璋  
さんである。同志社にいる中国からの留学  
生（台湾からのを含む）は十二、三人いる。

日ごろお互いに勉強が忙しいので、一緒に  
集まる機会は少なかった。互いに顔を知っ  
ているが、誰がどういう趣味を持っている  
かは知らない。黄さんのカラオケが上手だ  
ということが分ったのは初めてだ。一曲終  
わるとみんながもっと激しく拍手をした。  
「もう一曲、もう一曲」と拍手が終わらな  
い。それで黄さんはガイドさんにすきな曲  
を流してもらって、また歌い始めた。歌で  
バスの中の雰囲気が変わった。みんなの心  
を踊らせた。メロディーにあわせて、みん  
なが手と足を動かして調子を取りながら  
歌う。もし歌っている人がマイクを持たな  
かったら、誰が歌っているのかさっぱりな  
いぐらいのすごい大合唱になるのであっ  
た。バスの中はいつの間にかすっかりカラ



オケのムードになった。曲が終わるか終わらないうちにガイドさんに新しい曲を注文する人が幾人もいる。中にすぐ上手に歌ったのは韓国からの新入生の高瑩範さんだった。彼の喉はまるで知恩院の鐘みたいに大声量であった。それに感情も十分に歌に込めて歌っているのに、これでは玄人と自分の差もないではないかとみんなをびっくりさせた。あとで私が冗談に「惜しい、惜しい、高さんは芸能界に入ったらきっとスターになったよ」と言うと、高さんがニコニコ笑う。

留学生たちのほとんどは日本のカラオケが大好きである。カラオケは日本人の心を打つと同じようにわれわれ留学生の心も打つのである。なめらかなメロディーに人情あふれた歌詞がある。嬉しい時のものも悲しい時のものもいずれの時にも自分の心のありさまを歌う、その歌い方は多様である。私は音痴だがこういう歌を聞くのが大好きである。

この日私たち一行は東大寺、唐招提寺、薬師寺等日本文化の発祥地を見てまわった。広川先生のごあいさつに「みなさんが

同志社に来て、学問を研究するとともに、日本の歴史と風景も十分に楽しんでください」との挨拶に私たちは奈良の春の風景を満喫したのである。

一日おいて十五日にまた一日の旅行があった。この日のコースは京都周辺醍醐寺、平等院、観音寺と同志社田辺校地だった。醍醐寺と平等院のもっとも日本の典型的な庭園を見た私の心にもその綺麗で静かな感じが残っている。

昼食は宇治川に面した静山荘という料亭だった。広びろとした部屋から綺麗な宇治川と塔の島にある十三重石塔が見える。宇治川の宇治茶がおいしいそうだ。実はお茶を入れなくても、宇治川の水がおいしそうに見える。こういうところで食事をするとはまったく桃源境にいるという感じである。美味しい日本料理にうまいビール、師弟とともに乾杯するのであった。

この日のバスの中は依然として歌でにぎわっている。近鉄線を越えて、丘陵地みないな広びろとした所に入った。ここは同志社の田辺校地である。道路は舗装してある。丘も平らに削ってある。谷口調度課長

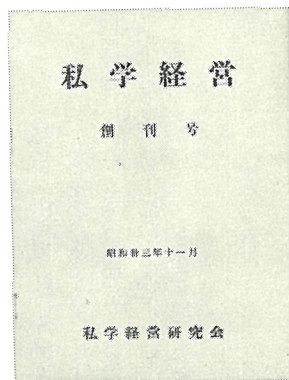
の説明によると、校地の造成はもう八五パーセントできている。展望台と言われる高い所に立つと、私は未来の同志社大学の姿を想像し始めた。たかさんの新しいビルが林立した大学のキャンパスに二万人ほどの学生がにぎわう。ここで新島先生の精神を十二分に生かして独自性と主体性をそなた人材を育成することはなんと素晴らしいことであろう。ここで私が二十一世紀に向かって学問を研究する学府を作っている新しい同志社の姿が見えたような気がする。

書きたいことは山ほどあるが、スペースがないから、ここで終わることにする。ところが報恩という言葉がある。私は同志社、同志社の先生方及び日本人の友人方から受けた恩恵はありすぎるほどあった。返しても返しきれないと思う。それで私は「全身に良心の充満したる丈夫」になろうと努力する。これで報恩致すつもりである。そして、この紙面を借りて、先生方に厚く御礼を申しあげ、また同志社の繁栄を衷心よりお祈りして筆をおきます。

（学校法人同志社新島基金第二回招聘中国留学生  
中国陕西省西安市 西北大学日本語科）

# 私学経営研究会の四半世紀

松崎 昭三



私学経営研究会が同志社職員有志の十三名をもって発足した昭和三十三年と言えば、戦後の学制改革がようやく国民の中に定着し、新制大学も十歳の誕生日を迎えた頃である。また私学が戦前からの国公立偏重の弊をぬけ、独自性と自主性をもつ一つの学校として、大学として認められるようになってきた頃であることに多言は要しない。同志社内においても各学校の整備が進むと共に、事務管理組織も改革され、三十一年には現在の事務機構が出来上った。

しかし制度が整備されることと反対に私学の運営、つまり経営は、インフレと進歩希望の増大と教育研究条件や施設・設備の

充実、教職員の待遇改善という状況の中で、資金調達を間に立てた循環現象、つまり学生数・学費とスタッフや施設の充実との追っ駆けっこにあり、経営と言える施策を行い得ない時でもあったと思う。

この頃のいくつかの出来事を『同志社年表(未定稿)』から拾ってみると、

三二、四、一六 弘風館一期工事完了献堂式

五、一七 原子戦争反対全京都学生総決起大会が大学で開かれる

五、二〇 短期大学の廃止申請  
一一、一三 大学入学金六千円値上げ

三三、四、一 教職員年金規程制定

五、一七 全寮協規約を制定

九、二七 大学定員増加申請

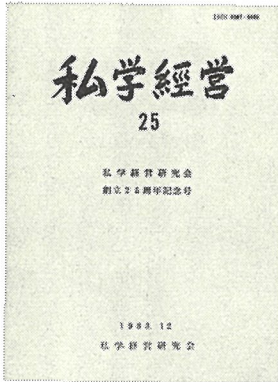
一〇、九 大学学資貸与金規程制定

三四、四、一六 新町校舎開校

九、二三 新町体育施設献堂式

一一、二一 第二部機械学科募集停止があり、当時の状況を物語っている。

この時期に「私学経営研究会」を始めようとした人々の思いはどのようなことであつたのだろうか。『創立ころの私学経営研究会』(座談会)(私学経営第二〇号)で、創立以来の有力メンバーの一人である渡部斉前総務部長は次のように述懐しておられる。



「私学でも経営を考える必要があります。しかし誰がそれを考えるか、組合は要求するだけであり、理事会も組合を選んだ理事が入るような状況で、経営機能をほとんど失いつつありました。結局は、事務職・管理職が考えざるを得ないのではないかと。こういうことを職員有志で考える組織が欲しい、またその研究成果を発表する機関誌を作りたい。そんな思いで木村さんに相談し、駒井さんや他の人々の協力で私学経営研究会が生まれました。」

この記事は大学時報一七一号(私大連盟)の『職員のための「紀要」』(川久保孝雄元慶応義塾塾監局長)でも職員のための紀要の原点として引用されており、評価を受けている。

職員が私学経営というものを真剣に考えるということは、「学校の事務員」という認識から、一つの自意識を確立する過程といえるであろう。今でこそ職員研修が色々の分野で行われているが、この年初めて一人の国内研修員が学外へ三カ月派遣され、管理監督者研修も三十六年にやっと行われた実情である。従って研究会の創始は学校側の研修という動機付によるものではなく、むしろ逆に研究会の活動の中から職員研修が芽生えてきたと言っても言い過ぎではないだろう。

「私学経営研究会」という名称は、学校は営利企業ではないという観念において、当時としてはかなり思い切った表現であり、それだけに色々と偏った見方をされていたのではないだろうか。何年もかかって会員が少しずつ増加して(現在は五十四名)、若い職員も入会するようになると当然「私学経営」という文字にこだわりが生じてくる。会の名称を「私学問題研究会」あるいは「私学研究会」に変更し、雑誌のタイトルも「私学問題研究」または「私学

研究」に改題すると言うものである。

ここは初心忘るべからず「よき教学のためよき経営ということ」で、その設立の精神は今日まで受け継がれている次第である。

「本会は私学経営の原理的研究を行うを目的とする」(研究会規約2)としている。これについて大塚節治総長(当時)は『寄稿・私学経営の創刊号を読んで』(第二号)において

「……これは具体的問題にふれることを避けるつもりであろう。だがそれでは現実問題の解決に寄与することができないのではなからうか。具体的問題にふれても善意を以て研究すると、政治的意図を以てするのとは自ら見わけがつくから、善意を以て研究する限り現実問題にふれて差支ないのではないかと述べられている。

また上野直蔵総長は『寄稿・「経営」ということ』(第三号)で、

「ある日、だれかが、こん度、学内で私学経営研究会というのが組織されて、機関誌「私学経営」が創刊された、ときかして



くれた。わたしは、この時「経営」という言葉にこだわりながらも、どんな人たちがやっているのか、すぐそれをきき出そうとはせず、研究会の誕生したことを心に温めていた。これは少なくとも同志社大学のありたきすがたを真剣に考えてくれる人々の出てきたしるしだとして喜びを覚えたためである。最初、わたしが「経営」という言葉にこだわったのは、それに二様の意味があるように考えたからなのである。広義には数学・業務・財政にわたる営みであり、狭い意味では経済的運営となる、と思ったことによるのである。」

と、述べられている。私学経営の原理的研究について、研究会同人の表明がないので、ご寄稿いただいた二人の総長のお考えを頂戴した次第である。

機関誌「私学経営」は当初年四回発行という大変意欲的な方針であったが、これは最初の一年間だけであった。会員が一通りの研究成果を発表してしまうと次の号の原稿が集まらず、編集担当者の大変な苦労が始まる。一人か二人の原稿を預っても印刷

に出すことはできないので、やむなく編集担当者が新しい勉強を急遽開始しそれで原稿の数を揃える、いつ三号雑誌で終わるかの思いであった。しかし一番長い休刊は二年半で、その後若干の消長はあったが、大体一年に一冊を刊行し、創立二十五周年には第二十五号を刊行することができた。

第一号から第二十五号までの内訳は、総長・理事長・学長等の寄稿十一篇、講演会記録七篇、論文・資料・書評等百十一篇、翻訳一篇、座談会・共同討議等五篇、研究会例会報告七十篇である。

機関誌の評価はその内容によって決まる。しかし私学経営ではご高名な先生方の講演記録と同じ号に、若い職員のせい一杯の論文があってもこれを誰がせめることができよう。本会が職員有志の自主的な相互啓発の場であれば当然のことである。同志社時報の表紙裏には学内各機関の学術雑誌の広告が掲載されている。ひと頃わが「私学経営」も掲載されたことがあるが何時の頃からか載せられなくなったのも、私学経営のこのような内容・性格によるものと思っ

しかし物事を続けるということは大切なことであり、第二十四号以降、国立国会図書館から、ISSN 0267-0639 という国際雑誌番号を頂戴し、表紙左肩に印刷することになった。

研究会例会は、会員が研究成果を同人の集りで報告し、そのテーマについての相互啓発を目的としている。しかしそれぞれ多忙な人々が集るのは困難で、初期には案内をしても参加者がないということがしばしばあった。その後会員が増えるとともに数名でも集まることができるようになり、次回は第百七回研究会を持つことになっている。私学経営に掲載したレジメも七十篇を数える。

私学経営研究会公開講演会は創立二十周年を記念して、研究会が同人活動の枠を抜けて広く私学一般に貢献したいという目的で年一回開催することになったものである。開催した講演題と講師は次の通りである。

大学と社会（駒井四郎大阪女子学園理事

長)

中央大学のニューキャンパスについて  
(小柳稔中央大学理事長室企画課長)

生きがいと創造性 (市川亀久彌同志社大学  
教授・理工学研究所)

二十一世紀の同志社を語る (上野直藏同  
志社総長)

斜めから見た私立大学 (北川盛一日本私  
学振興財団総務課長)

私の見た日本の大学 (K・シユベネマン  
同志社大学助教授・文学部)

私立大学の将来と国庫補助 (石田昭男私  
大連盟事務局長)

私大白書―私立大学きのう・きょう・あ  
す― (日塔喜一私大連盟調査企画係長)

研究会の最近の話題は、カーネギー財団  
―教育の発展―『大学の統轄―高等教育の  
管理運営に関する報告書―』の翻訳であ  
る。これについては京都新聞五十九年三月  
十八日に

『事務職員が、経営書、翻訳/英書「大  
学の統轄」/同志社大の「研究会」有志/  
“生き残り”考えるタタキ台に/共通の問  
題、将来を示唆/一年がかりの労作近く刊

行』

として報道されたところである。研究会  
有志十一名が英語研究部を編成し、カーネ  
ギー財団から翻訳出版の許可を得、私学経  
営第二十五号に収録されている。また私大  
連盟「大学時報」一七六号以下に転載中  
である。

職員の研究成果を刊行しているのは、塾  
監局紀要(慶応)、研修紀要(関学)、立教大  
学職員紀要、事務研修(広島修道)が筆者  
の知るものであるが、いづれも大学予算か  
補助金によっていると聞いている。しかし  
職員有志がポケットマネーを出し合って運  
営し、二十六周年を迎えたのは、わが私学  
経営研究会において他にない。当初十三名  
で発足した研究会も現在は五十四名を数え  
る。川久保慶応義塾元塾監局長の『経費  
(は)……発行人が職員有志であれば、有  
志の拠出金に拠らなければならない。有志  
にとってその負担は少なくないが同志社職  
員有志の「私学経営研究会」はこれを実行  
している。素晴らしいことだと思ふ。」と  
お褒めをいただいたことを紹介して、駄文を

終わりたい。

(大学就職部長)

### 表紙の言葉

ハリス理科学館

明治二十三年、米人のJ・N・ハリス  
氏の寄付によって建てられたこの建物は、  
ルネッサンス建築を思わず堅牢さを  
今も保っている。

まわりの喧騒の中にある時でも、この  
建物は明るさと落着きを失わない。南向  
きに建てられたためなのか、建物のバラ  
ンスの良さのためだろうか。

小野功夫 (中学校教諭)

# 武漢大学から同志社へ

李 国 勝

## 最初の印象

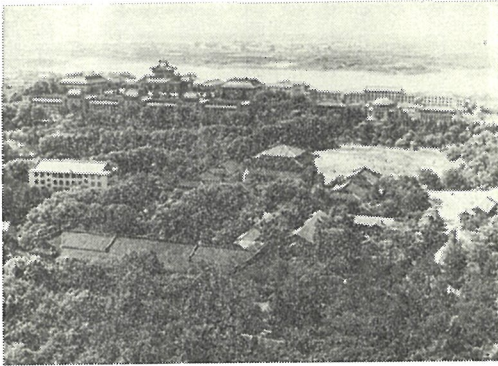
上海を飛立った日本航空機が、大阪伊丹空港に降りたのは丁度午後五時十五分だった。ああ、やっと日本についたなあ、という実感がこみ上げて来た。現実の日本はいつたいていどの国なのだろうか、といった気持ちや、私にとっては初めての外国なのでまたわくわくするような感動も味わった。日本に来てからの一カ月間は、諸先生方にゆきとどいたご親切なご配慮をいただいでいふこちらでの生活にも慣れ安心した。京都は文化財の古都で、和風の都市であ

る。最初に強い印象をうけたのは、規模の大きい、六十五ヘクタールほどもある京都御苑である。まるで北京の頤和園に來ているような感じがした。來日して間もなくの三月中旬、私たち留学生は同志社主催の觀光ツアーに参加する機会に恵まれて、奈良と京都の名所を見物することができた。その中でとくに平等院・東大寺・唐招提寺などのお寺を見たときには、自分が外国である日本にいるような感覚がまったくふつ飛ばされたようだった。ものすごく発展し欧化しつつある今日の日本において、奈良と京都は日本旧来の文化的特色をそのまま残すすばらしい都市と言えるだろう。私たち中

国の留学生にとってまさにこのような都市は日本に対する親近感を呼びおこす好対象であろうと思う。ちょっと慣れないことには自転車で街を走ることも困難である。なぜならば、日本では自転車もバイクもすべて左側通行だが、中国では逆の右側通行である。今はまだ慣れたが始めのうちには心配だった。あまり広くない街にこんなにたくさんさんの車があふれていて、すれすれの狭い歩道にも自転車と人が同行していたりする。しかし、交通規則が非常に合理的にできていて、赤信号と青信号が数十秒おきに点滅する。人びとはその信号を厳守している。自動車用の信号には、横断する人の安全のため、赤と青信号の間に黄信号もつけられている。つまり、赤と青の間に間をおくことで、「いらいらはあなた自身の赤信号」といった注意なのだろう。街には交通警察官の姿がぜんぜん見えない。ただ信号警察があるだけである。

京都の町は北京・西安と同じく碁盤の目のように整然として方向がはっきりしている。あちこちにはお寺や神社がある。それは、賑やかで混雑している街路に比して、





武漢大学キャンパス全景

いかにも静かで優雅な別世界のように思われる。そこは、一つの空間と時間の調節をするための格好の場所として、その必要性が示されているようだ。店などに行くと、必ず「いらっしやいませ」という言葉で迎えてくれる。買物したあとには「オーキニ」、でも買物しないときでも、「ありがとうございました」と言っで送る。前者は誰しも納得できるが、後者は少しややこしそ

うだ。しかしそれは、「今度は買わずに見ただけにしておいて、このつきには、またいらっしやっでおすきな物を選んでください」という意味において、わざと「感謝」のことはを使うのではなかるうかと思う。これは商売といえは商売、礼儀といえは礼儀である。日本人同士のお辞儀やあいさつなどをよく目にする。さすがに礼儀正しい国である。

### 同志社大学

以前、私には同志社大学についての知識があまり豊かではなかったが、来日後、だいぶよくわかってきた。同志社は、悠久なる歴史を持つ、はつらつたる、学問研究が厳密でつつしみ深い、教師の力が充実している大学である。私は三月はじめに來たので、西北大学からの周斌君が修士学位を受ける工学部の卒業式に参列することができた。「父母席」に坐っでその卒業式のありさまをこの目でしっかりと見た。卒業生はみなきれいに服装を整えており、男子学生はそのほとんどがあざやかな紺青の洋服、

女子学生には派手な和服を着ているものもあった。二階席の父母達は立ちあがって階下席にいる我が子を見捜している。この父母席の両親たちはどんな気持なのだろうか。

しばらくして式が始まり、美しいパイプオルガンのメロディが流れてくる。学生たちは校歌や讚美歌を歌う。残念ながら、私は歌えないので、その音楽のリズムに合わせながら口を動かしていただけだった。学生生活をより充実したものとし、より楽しく過ごすために大学には学生達自身のサークルがたくさんある。空手、書道、新劇、軽音楽、撮影などさまざまだ。単なる勉強だけではなく、生気溢れた雰囲気包まれている。

これら直接目に映ったもの以外に、「私学同志社」のページをめくってみたらもう少し深いところのものも解つてきた。同志社は新島先生によって創立された大学であるが、その「私学同志社」の中に新島先生の教育精神がよく示されている。「大学は学問研究の場であると同時に教育の機関でもある。学生諸君にとっては学問を通じて

人間形成をおこなう場でもある。これは三合一、智・徳・体三育の調和一致を意味することであり、まさに同志社徽章の精神ではなくて何だろう。ちょうどわが国の「徳育・智育・体育のいずれの面でも発展せよ」という教育方針と同一のものである。また、「大学の教員は研究者であると同時に教育者である、研究と教育というこの二つの側面を統合するのが大学である」。これもわが国の「教書教人」（学問を教えると共に人間の育成をはかる）に似ている。私はこのような学校に来て勉強できる機会に恵まれたことは、自分自身の将来にとってほんとにすばらしいことであり専門研究の絶好のチャンスだとますます感じている。

### 友情のため

私は武漢大学から同志社に来た初めての人間であるが、両校今後の交流と友情のためにいささか力を尽したいと思っっている。ここに来てまもなく、何人かの先生に聞かれた。「中国は広いから武漢がどこに、武

漢大学はどの辺にありますか」と。中には中国に行かれたことのある先生もおられるがまだ武漢には行っておられないようだ。まず、ご熟知の唐の詩人崔顥の「黃鶴樓」から見よう。

昔人已に白雲に乗じて去り

此の地空しく余す黃鶴樓

黃鶴一たび去って復た返らず

白雲千載空しく悠悠たり

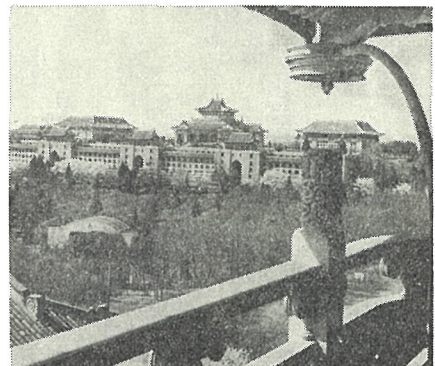
晴川歴歴たり漢陽の樹

芳草萋萋たり鸚鵡洲

日暮郷関何れの処か是なる

煙波江上人をして愁えしむ

湖北省武漢市は漢口・武昌・漢陽から成り、いわゆる「武漢三鎮」である。武漢は揚子江をはさんで三つの部分にわかれているのである。漢陽は揚子江をへだてて武昌の対岸の町、鸚鵡洲は武昌の西南、揚子江中にある中洲である。黃鶴樓はかつて武昌の西端、揚子江岸にあった。五十年代、揚子江大鉄橋（武漢長江大橋）を造るため、取りこわされてしまったが、去年から武漢市人民政府の手によってその有名な古跡は現在復元工事中である。二年後、黃鶴樓は



武漢大学図書館（前景）

もとの姿でいきいきと現れるであろう。

漢口は商工業の中心、武昌は文化教育の中心である。武昌には大学、学院や専門高等学校などが数多くあり、全中国において第三番目の地位にある。歴史的な大事件である辛亥革命——一九一一年十月十日夜武昌において兵を挙げ清朝の封建支配を顛覆させた——。今もその「武昌首義革命紀念館」が史跡として保存されている。

武漢大学は一九一三年に創立された文理科の総合大学で、全国の重点大学の一つ

である。それは景色のいい風致地区——東湖のほとりに位し、「珞珈山」の麓に聳えている。毎年三月ごろになると、桜の花が咲きほこり、瑠璃屋根の校庭を美しく飾っていて、ほんとに自然の景色に恵まれたところである。学校には、中国言語文学・哲学・経済学・経済管理学・法学・図書館学・外国言語文学・フランス語・数学・計算機科学・物理学・空間物理学・化学・生物学・ヴィールス学など十六の学部がおかれており、それはさらに三十七の学科に区分されている。キャンパスは三十万平方メートル、在校生は約五千六百名、通信教育の学生は約一千一百名、研究生は六百名あまり、教員は約一千八百名。実験室は百十六、図書館の蔵書は百七十五万冊。現在は新しい図書館を建築中、ほかにコンピュータセンター・計測センター・AV教育ビル・動植物標本ビル及び六つの学校附属工場がある。しかし、わが国の教育はまだ近代化建設に充分適応しているとはいえないし、高等教育機関はその規模と数がまず足りない。今後もっと拡大・増加しなければならぬと思う。そしてまた外国との文化

学術交流をもっと盛んにしなければならぬ。お互いの学びと促進を通じてこそ、お互いに発展していくことができると思ふからである。

私は許された在日期間の二年間に、もともと日本の実情について理解を深めるとともに、勤勉な日本人の心、暮らしをよく知って、学んだものを持ち帰るつもりである。とにかく、日本での生活はこれからである。ここで私は新島先生のことばの一つを思い起さずにはいられない。「労働は人生の良薬なり。苦難は青年の業を成すの階梯なり」。

(学校法人同志社新島基金第六回招聘中国留学生  
中国湖北省武漢市武昌 武漢大学)



## D・W・ラーネッド『回想録』刊行について

D・W・ラーネッド先生は、アメリカン・ボードの教育宣教師として来日、新島先生、J・D・デイビス先生と共に、開校直後から半世紀以上も同志社の教育に貢献されました。その間、同志社大学の初代学長を兼務され、神学・経済学・政治学等の学界にも顕著な業績をのこされました。

先生のご永眠四十周年(昭和五八年)にあたり、遺徳をしのぶ事業として、先生が同志社を引退されて帰国されるとき、当時の『同志社新聞』に寄せられた「回想録」等を復刻しました。

回想録 D・W・ラーネッド

ラーネッド先生の「回想録」によせて

………上野直蔵

同志社創立回顧

予が七十年の生涯

ラルネデ回想録

三つの自由を………訳・大塚節治

訣別の辞

編注・解説

ラーネッド先生略年譜

発行者・学校法人同志社  
取扱い・同志社収益事業課

頒 価・三〇〇円